

スペインのニンニク用機械で将来の農業を考えた

北海道紋別市のナカザワアグリマシーン(株)の山田俊作ダニエル代表がスペイン人のカルロスさんとともに来社された。カルロスさんはニンニク用機械に特化したスペインの農機メーカーJBROCH社の方で、同社は種子処理から播種、収穫、乾燥・調製までの一連の機械を扱う世界で唯一のニンニク専門メーカーである。ナカザワはその輸入元になる。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

ナカザワは、農機の輸入代行や日本では珍しい機械の輸入を手がけている会社で、本誌読者でもお世話になっている方は少なくない。しかも、同社の場合、商社を介さず販売店レベルの会社として輸入を行なっているため、大手よりもはるかに安い価格で調達が可能だ。以前、イタリアのENMA展で見た移動式の穀物乾燥機を紹介したが、その乾燥機を北海道だけではなく、府県の試験研究機関にも同社が輸入・販売している。

さて、両氏はニンニクに関しての情報が欲しいと訪ねてこられたのだが、僕はその筋に明るいわけではない。ただ、カルロスさんのレクチャーを聞くうちに、同社のニンニク用

機械の意義だけではなく、その話を通してニンニク生産に限らず、日本の農業経営者がこれからの時代に取組むべき経営課題が明確になっていくのを感じた。

水田への畑作技術体系の導入や子実トウモロコシ生産を語るとき、面積当たりの収益より投下労働時間当たりの収益で経営を考えるべきとは本誌がいつも触れてきたことだ。日本の農家にとってあまりにも慣れ親しんでしまっている慣行の水稲生産技術やコメではなく、ニンニクというマイナー作物の生産であればこそわかりやすいかもしれないからだ。

慣行の手仕事での手工業的な調製作業や人力による播種がまだ一般的なニンニク。しかも、これから進む労働力の圧倒的な不足。特殊な作物として産地が限定されてきたニンニクであればこそ、新規産地で従来の生産方式にこだわらない革新的なニンニク経営が必要とされる時代になるからだ。仕向け先も市場ではなく、加工需要に向けた契約栽培。消費者の国産志向だけに頼る高値販売がいつまでも続くとは思えない。規模拡大とコストダウンは喫緊の課題だ。JBROCH社の一連の機械は、北

海道だけではなく、青森県などの農業経営者ら5、6人がすでに導入している。

話を聞いて驚いたのは播種機には機械式のほかに真空タイプもあることだ。気になるのはニンニクの塊茎が植えたときに転んでしまうのではという疑問だったが、それに対してカルロスさんはこう答えてきた。逆さに植え付けるということはほとんどなく、大体は横向きで植え付けられる。それでも丁寧に植え付けた場合と比べ成長にそれほど大きな差はない。それより作業スピードが遅いために1日の処理量が限定され、播種適期を逃すことや慣行栽培ではダイナミックな規模拡大もできない。そのことのほうが経営的に問題ではないかと。ただし、販売するうえでこの機械の弱点はマルチ栽培ができないこと。株間は狭くできるので面積当たりは変わらないが、条間が45cmくらい必要なため、慣行の植え付けに慣れた農家には受け入れられにくいこと。しかし、真空播種機であれば4条でも8時間で3haをこなせる。

最近では国内メーカーも各種の播種機を開発・市販するようになってきているが、こうした海外の技術が我が国農業にインパクトを与えることを期待したい。